教化センターだより

No. 414

発行日　2021 年 12 月 1 日
発　行　真宗大谷派大阪教区
教化センター
TEL　06-6251-0745
FAX　06-4708-3278

◆寺川 俊昭先生書籍コーナーを御堂文庫内に設置◆

寺川（てらかわ） 俊昭（しゅんしょう） 先生

さる、9月28日、大谷大学名誉教授の寺川俊昭先生（93歳）がご還浄された。

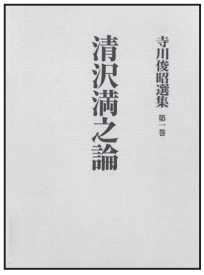
教化センターでは、これまでのご活躍に敬意を表して、寺川先生書籍コーナーを設置し先生の著作を紹介する。

【略歴】

1928 年　広島県生まれ
1952 年　東京大学文学部宗教学科　卒業
1954 年　東京大学大学院　修了
1988 年　大谷大学学長　就任
1999 年　大谷大学名誉教授　就任

教化センター内に設けた御堂文庫「寺川 先生コーナー」

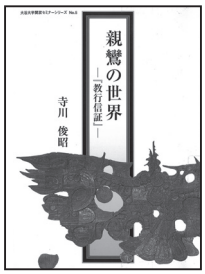
◆御堂文庫に蔵書されている寺川先生の著書◆



『寺川俊昭選集』（全１２巻）　〈発行〉文栄堂

無上涅槃から始まる親鸞への聞思、そこに寺川先生の真宗学の立脚地がある。そこから一切衆生の宗教心が満たされ全うされていく世界を親鸞に聞思し続け、どの論文であっても学問として表現しようとした営みこそ寺川俊昭先生の親鸞研究であると仰ぐことである。

（『別巻』あとがきより引用）



『大谷大学開放セミナーシリーズ№５
親鸞の世界 -『教行信証』-』　〈発行〉大谷大学

大谷大学は、いわゆる生涯学習という社会的要請に応えて、一九九〇年（平成二）から、開放セミナーを開設した。その第一回のセミナーとして、社会学の岩田慶治教授と真宗学の私とが講義を担当したのであるが、この書は「親鸞の世界 -『教行信証』-」という題のもとに行った私の講義の記録である。

（あとがきより引用）

ほか多数所蔵

― 教化リーフレットのご活用について ―

４枚の「教化リーフレット」は、各寺院・教会において「寺報」や個別に複写しての配布、同朋会や聞法会での教材としてご活用いただければ幸いです。

― １月のリーフレット ―

リーフレット①
「掲示板のことば……教化センター
『〝恩を知る〟とは
立ち上がる力を
いただくこと』

リーフレット②
「今月のことば」……由上義孝
『我亦在彼摂取中
煩悩障眼雖不見
大悲無倦常照我』

リーフレット③
「もしもし相談」……安城覚正
『残虐シーンで
心に影響ないか心配』

リーフレット④
「仏典マンガ・仏さまのおしえ」
『酔っ払った修行者』

（敬称略）

― 事務休暇のお知らせ ―

大阪教区教化センターでは、12月29日（水）～1月7日（金）まで、年末年始事務休日のため、事務所を閉所させていただきます。

事務の開始は1月11日（火）からとなります。

〝恩を知る〟とは

立ち上がる力をいただくこと

住職を継承して十年ほど経つが、就任後はじめの数ヶ月は以前の名残りで若院（わかいん）や若（わか）と呼ばれることが多かった。

そのことを見かねてか毎月の定例にいつも参加されるご門徒が「もう住職になったのだから若院と呼ぶのは失礼だ、もし呼んだ人は罰金としてお賽銭するのはどうでしょう」ともちかけた。自分こそよく若！と呼ぶのにと思った。そしてそれだけならまだ良いが私にも「住職も若院と呼ばれて返事をするようでは自覚が足らん、もし返事したら同じようにお賽銭な」と冗談半分と思われた流れからすごいルールが出来てしまった。

それからは普段の和やかさは変わらずともどこか変な緊張感が漂っていた。考えればご門徒多数に対し住職という構図は明らかに不利で、また呼ばれるとついつい返事をしてしまうという悲しい状況。懐はどんどん寂しくなる一方、一年程門徒会計が多少潤ったことは言うまでもない。

ただ当時はそのご門徒の突飛な言動に理不尽さえ抱いていたことだが、今思い返してみると不思議なことに、本当に親身になって私を支えて下さり、住職として育てられていたのだなと感じる。

そして今でもそのご門徒が晩年よく仰っていた「住職は血吐くまで勉強してわしらを導いてくれな困る」という言葉が私のお尻を叩いてくれている。（教化センター）

「掲示板のことば」は教化センターで考案・作成したものです。

今月のことば

我亦在彼摂取中
煩悩障眼雖不見
大悲無倦常照我

我また、かの摂取の中にあれども、煩悩、眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲倦きことなく、常に我を照したまう、といえり。

この三行の了解の重要点は、論理的に認識していく過程を、宗祖は言っておられるのではないということです。前回述べたように、私たちは（比べ・計り・囲う）凡夫です。

その凡夫のエゴイズムの論理で、次の三行を引き寄せると、〈私たちはどうしようもない凡夫だが、だからこそ、如来がうまく助けて下さる〉と、「極悪深重の自覚」がどこかへ飛んでいってしまいます。この四行は、同時・即時です。助からない自分が深く慙愧できて、私一人として、如来の救済に真向かいに成れるのです。

「摂取」の左訓に、宗祖は「摂は者の逃ぐるを逮わえ得るなり。取は迎えとる。」と注しておられます。私たちの機根は利己心で成り立ち、如来に呼びかけられても逃げていくのですが、それをなおも追いかけ迎え取る働き…が摂取であると言われるのです。

「煩悩」は、私たち凡夫の「煩い・悩み」という、生死の事実であり、私たちは、自分を物指しにしか、生きそして死ねないのです。果たして、私の「念仏」は摂取の救済に気付かずに、エゴの鎧を纏うことに終始するのでしょうか。

そこで無根でしかない私に、真向かいになって「私一人」の生死全体へと、呼び掛けられるのが「悲」です。インドの言葉で「痛焼」の意で、〈如来が衆生のために、身を痛め焼いて尽くす〉ことを意味しています。言い換えれば、根源的な『寿』の願い・憶念です。

安田理深師は次のように言われます。「どこまでも救われない自分が見えてくるということは、どこまでも救われなければならない自分が見えるということである。救われたつもりの、救われたはずの自分に立つと、人生は『想い出作りの朝露の一瞬』に過ぎない。」

煩悩は無限でしょうが、一人の物指しの計りごとを越えません。如来大悲は無涯底・無尽蔵です。私たちは凡夫ですから、生死が尽きるまで、信心は常に揺らぎます。

しかし、大悲に基づく合掌の日暮しを根っこに頂いておれば、安心して往生道を歩んで行けるのでしょう。

宗祖のお言葉に「弥陀の悲心招喚したまうに『籍る』というは信なり」とあります。その悲心が喚ぶ声に「はい」と答えるのが、お念仏なのです。

（由上　義孝）

今月のことば出典『正信偈』
『真宗聖典』　２０７頁
『真宗大谷派　勤行集』（赤本）　２９頁

もしもし相談

問

小学一年生の息子が今流行りの漫画が大好きで、クラスのお友達もみんな夢中なようです。

ですが、人が多く殺される残虐なシーンなども多く、息子にはまだ早いような気がしています。息子だけでなく、今の子どもたちの心の発育に影響がないか心配です。

（39歳・女性）

答

ご相談者と年齢が近く、幼い子どもたちをかかえる私と妻も、同じような心配事をかかえています。

ある時、コロナ禍による不自由な生活を強いられることになった子どもたちを不憫に思い、私たちは今流行りの漫画を買い与えることにしました。緊急事態宣言が一旦解除され、映画化されたその漫画を家族で観に行きました。劇中、「老いるからこそ死ぬからこそ、たまらなく愛おしく尊いのだ」と言い放った登場人物の去りゆく背中に感動した私は、人目をはばからず大号泣しました。壮絶な戦闘シーンが繰り広げられる中、殺戮や暴力とは全く異質な、人間を生きるうえで忘れてはいけない大事なことをその登場人物が教えてくれたのです。

その昔、仏教を開かれたお釈迦さまは、人間にとって大事なことを「ご本尊（ほんぞん）」として明らかにされました。ご本尊とは、崇め奉る〝もの〟ではありません。私たち人間にとって本当に尊い〝こと〟が、仏教のご本尊なのです。〝もの〟に縛られる人間に、本当に尊い〝こと〟を教えるためにお釈迦さまが立ち上がり、仏教を開かれました。私たち人間にとって本当に尊いことは、いのちに頭を下げて、「南無阿弥陀仏」と手を合わすことです。

その南無阿弥陀仏には、〝比べることのない光り輝くいのちを生きる〟という意味が湛（たた）えられています。今を生きる私たちはあまりにも多くのいのちに背き生きています。いのちを大切にと言いながら、いのちを粗末にする人間の在り方、本当に尊いことを忘れ、嘘に嘘を重ねて本当にしていこうとする愚かな私たちを呼び覚ますために「いのち」の方が立ち上がり、「南無阿弥陀仏」のご本尊に成ったのです。

「わかきとき、仏法はたしなめ」という蓮如上人のことばがあります。心配が尽きない今こそ、大切なお子さんと大事な「いのち」について話し合ってみてください。いのちの尊さを教えてくれる「南無阿弥陀仏」のご本尊のあるくらしこそ、私たちの心の発育に欠かせないことではないでしょうか。

（安城　覚正）

仏典マンガ・仏さまのおしえ

絵：小川ゆきえ〈198〉

参考仏典：『ジャータカ物語』
仏典や仏教童話などを参考・題材にして教化センターが創作したお話です。